聖書の言葉
平和を実現する人たちは
幸いである。
その人たちは
神の子と呼ばれる。
マタイによる福音書5章9節

シャロームタイムズ

2019年8月25日（日）発行
宗教法人
野毛山キリストの教会
〒220－0032　横浜市西区老松町30番地

平和聖日

今年は7月28日を当教会の平和聖日として、平和について考え、過去の戦争の過ちを忘れないように、風化されないようにと覚えて礼拝をささげました。未だになくならないテロ・戦争。また、日本国内でも残虐な信じられないような事件が日々起こっています。戦争がないということだけが平和ではありません。共にキリストによる平和を祈りましょう。

説教　「平和への道を歩もう」より

牧師　奈良　昌人

聖書　マタイによる福音書26章47節以下

「そのとき、イエスと一緒にいた者の一人が、手を伸ばして剣を抜き、大祭司の手下に打ちかかって、片方の耳を切り落とした。そこで、イエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣をとる者は皆、剣で滅びる。」」

子どもを愛し、将来を担う子どもたちのために主による恒久の平和を望み、み言葉を力強く伝えてこられた金児榮治牧師が7月19日に天の主のみもとに召されました。74年前の1945年5月29日、金児先生が14才の時に横浜大空襲でお母さまを亡くされたことが、金児先生が何よりも平和を望まれる思いを強くした理由ではないかと思います。あの終戦から74年。戦争を知らない世代が8割を越えた今、日本は戦争ができる国へと歩み始めています。教会に集う私たちは、この事態をどのようにとらえたらいいのか、み言葉に聞きましょう。旧約聖書には、出エジプト記の「十戒」で「殺してはならない」と命じられているにもかかわらず、数多くの戦争が記されていて矛盾を感じますが、そこには目的があります。

第一に、神の栄光を表すためです。出エジプト記に、モーセに率いられてエジプトを脱出したイスラエルの民が途中、前は紅海、後ろからはファラオの大群という絶体絶命のピンチを迎えたことが記されていますが、その時モーセは主のみ業に目を留め「あなたたちは静かにしていなさい」（出エジプト14:14）と民に告げます。そこで神は「わたしはファラオとその全軍、戦車と騎兵を破って栄光を表す。」（出エジプト14:17）と言われ、その通り、栄光を表されたのです。

第二には、イスラエルの民の信仰を訓練することです。たとえ負けそうな戦いであっても神によって勝利するのか、それともこの世の力に頼って敗北するのかが問われています。一方、新約聖書では非暴力が貫かれています。主イエスは「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」と、十字架へと向かって逮捕される時に言われました。主イエスは非暴力を貫かれて十字架で死なれました。人を殺めるのではなく、自らの死をもって救いをもたらされたのです。このようなことがありました。ゲッセマネの祈りの後、イスカリオテのユダは、剣と棒を持った主イエスを捕らえる者たちと一緒にやって来て主イエスに接吻し、主イエスは捕らえられました。その時、ある一人が剣を抜いて大祭司の手下に打ってかかり、片方の耳を切り落としました。恐ろしさのあまり剣を抜いてしまったのですが、平和を実現するためにはどんなことがあっても剣を抜いてはなりません。武力は新たな武力を生み出し、その先に待ち受けているのは滅びです。主イエスは、父（神）に「お願いすれば、十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださる」（マタイ26:53）という力を持ちつつも、自ら剣を抜かない道＝十字架への道を選ばれ、歩まれました。その十字架への道は、聖書のみ言葉が実現するためでしたが、み言葉の実現は主イエスに対する人間の側の数々の裏切りが露呈することでもありました。「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。」（26:56）のです。このように、ゲッセマネにおいて主イエスは人々から見捨てられました。何時の時代も、主イエスに従う者の姿勢が問われます。しかし、その弱い者をも主イエスは十字架の死と復活によって救い、用いてくださるのです。主の復活に出会ったペトロたち初代教会の使徒たちは、この主の平和の道を歩み続けました。私たちは新約の民ですから、この使徒たちの姿に倣いつつ、金児榮治牧師の思いを継承することが神の栄光を表すことになります。自分の弱さを自覚し、祈って聖霊の助けをいただいて、人を恐れるのではなく神を畏れ、平和への道を歩んで参りましょう。

「ヒロシマに住んでいたわけでもない、戦争を知らない。
そんな自分でも何かできることを考えた。
いろいろ調べて、大変なことがあっても頑張って生きてきた人がいることがわかった。
神さまから、自分にできることを示していただき、自分がいただいている力を使ってよい未来をつくっていけたら嬉しい…」
というみなみさんの言葉がとても心に残りました。
わたしたちにできることは？　わたしにできることは？
みんなで平和の種をまきましょう…子どももおとなも…
ななみさんのお話、じっくりお聞きしましょう…（裏面）

シャローム
タイムズのイラストは、
すべてみなみななみさん
のイラストを使用させて
いただきました。
感謝！

礼拝堂の後ろにつくられた特設平和展

みなみななみさんの紹介・・・

みなみさんは、イラストや漫画、聖書の言葉をモチーフにした散文詩やイラストルポなど、絵と言葉で綴る作品を作られています。

20歳の頃、洗礼を受けられ、クリスチャンになられました。

広　島　（ヒロシマ）

1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分。
原子爆弾リトルボーイは、第33代アメリカ合衆国大統領ハリー・S・トルーマンの原子爆弾投下の大統領命令を受けたB-29（エノラ・ゲイ）によって投下されました。

この１年に亡くなった方　5068人
計31万9186人

長　崎　（ナガサキ）

広島の3日後の1945年8月9日午前11時2分、
B-29（ボックスカー）が長崎市に原子爆弾　ファットマンを投下しました。

この１年に亡くなった方　3402人
計18万2601人

聖書の言葉
平和を実現する人たちは
幸いである。
その人たちは
神の子と呼ばれる。
マタイによる福音書5章9節

シャロームタイムズ

2019年8月25日（日）発行
宗教法人
野毛山キリストの教会
〒220－0032　横浜市西区老松町30番地

イラストレーターみなみななみさん

「父の東京大空襲」を描いたわけ

この絵本を描いたのは、父の思いを伝えたいと思ったからです。子どもの頃、父と祖母は時々戦争の話をしていました。昭和のコタツでみかんを食べながら普通に話していました。「３月１０日、あっという間に周りが火の海になったんだ。火の粉を浴びないように、布団をかぶってお父ちゃんとお母ちゃんと三人で逃げた。家を出たら後ろでバキバキと音がすごいしてね。自分の家が焼けて壊れるところを見たんだ。三人で逃げていたけれども、でもはぐれてしまった。敵の銀色のB２９が低空飛行をして。シュルシュルと音を立てて焼夷弾がいくつも落ちてきた。絨毯攻撃と言って周辺から囲むように焼夷弾を落として東京の街を炎で取り囲んで人が逃げられないようにしたんだ。熱くて川に飛び込んだ人たちが川の中でたくさん死んで行ったんだ。体育館に避難して、呼吸が苦しくなって、、ハアハア、と。翌朝真っ黒焦げに死んでいる人、死んだと思っていた人が、配給の時に、むくっと起き上がって、乾パンを渡されたけれども食べることもできないまま、乾パンを持って死んでいた」そういう話を聞きました。でも、父たちはお茶を飲みながら、普通に話していたので、私はそれを特別なことと思わずになんとなく聞いていました。

その時は父の気持ちは全然わかっていませんでした。私にとっては、おじいさん、それからおじさんにあたる人が３人が戦争で亡くなっていると聞いても、会ったことのない人たちだったので、特に悲しいと思ったこともありませんでした、

空襲を受けて家族を失い、家を失い、それまでの生活を全部失った父たちがどんなに大変だったか、辛い悲しい思いをしたのかということも、全然想像できませんでした。

なぜなら、それを話している時の東京はすでにビルが立ち並び、父には、家も仕事も家族もあって普通に見えたからです。

でも、父たちは「戦争はひどい、戦争は二度としてはいけない」とよく言っていたので、そういうものなんだな、と自然と思うようになりました。

私が高校生くらいになると、だんだん親と真面目な話をするのが面倒になり、戦争の話を聞くこともなくなりました。それからずっと時間が経ちました。３年前に父が亡くなりました。それから父が若い時に書いた東京大空襲の記録を何十年ぶりに読み返しました。そこには、戦争がどんなにひどいことだったか、家族との幸せな普通の毎日を突然失った悲しみ、そして、これからは生き残った家族を大切にしたいという父の思いが綴られていました。それまで私は、小さい頃に何度も聞いて知ってるつもりになっていましたが、父の思いはわかっていませんでした。父が戦争で失ったものの大きさ、戦後何年経っても続いていた父の辛さや悲しみなど、全然想像することができていませんでした。そのことにその時初めて気づきました。

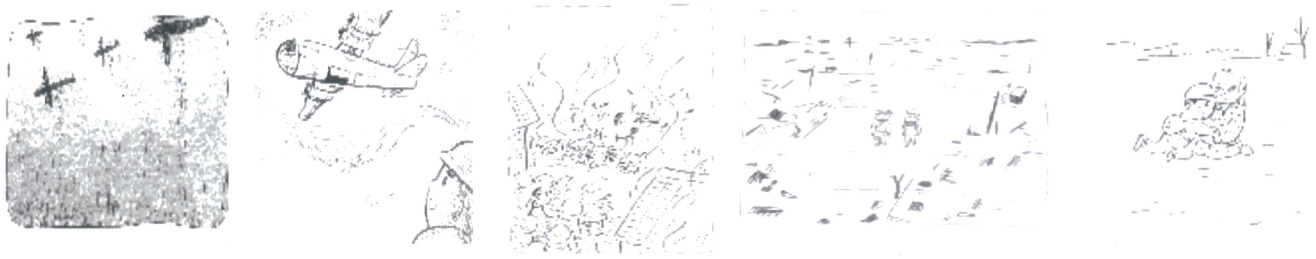
生きている時にもっと戦争の話を聞いてあげればよかったとも思いましたが、もう遅すぎました。でも父と祖母がその時の記録を残していてくれたので、本当に良かったです。

「父の東京大空襲」の小さな絵本を描いて、自費出版しようと思いました。絵本にするために父の手記と祖母の記録を何度も読み返し、その日の出来事、その時の気持ちを絵で表現しよう、と思って父の気持ちに寄り添おうと描いているうちに、父の思いに触れることができました。

聖書は「喜ぶものと共に喜び、泣くものと共に泣きなさい」と書いてあります。

人の気持ちに寄り添う、というのは想像力がないと、難しいことで、自分の気持ちばっかりしか考えられない私にはなかなかできません。でも父の手記を読んで、絵本にする、という過程そのものが、父の気持ちに寄り添うこと、父の悲しみを悲しみ、喜びを喜ぶことになったように思います。

父の戦争から何十年も経って、父が亡くなった後になってではありますが戦争はひどい、平和がいい、と訴えていた父の思いを自分の手で伝えたくてこの絵本を描きました。



以前、アメリカのスミソニアン航空博物館で、原爆展が企画されたことがあります。

ヒロシマに原爆を落とした「エノラゲイ」の修復に合わせて、それと同時にヒロシマとナガサキの被害の写真展もする予定だったのです。

しかし、アメリカの昔、兵隊の人たちから抗議が起こりました。原爆を落としたのは正しかったと思いたいので、被曝された被害者の悲惨な様子を展示されると困るのです、結局被曝の被害の写真展は行われず、戦闘機だけが展示されました。

そこには国の政治や退役軍人の立場など色々あって難しい問題です。

原爆の被害について少しでも調べることができる人たち、誰かが語らなければ、世界の他の人たちはなかなかそのことを知ることはできません。

　さて、私は絵を描く機会をいただいて、実際よりも柔らかい表現で描きました。目を背けたくなるような状況でも、絵本に目を背けてもらっては描いた意味がないので、その辺は柔らかい表現にしました。はだしのゲンの漫画家さんも、実際よりもだいぶ柔らかく描いたと言っていました。

原爆が落ちたこと　それがどんなにひどいことだったかということ、それをできる範囲で伝えていくのが大事なのだと思います。

自分で絵を描くために調べる、ということで、私は知らなかったヒロシマのことを以前よりも少しは知るようになりました。

今、ヒロシマの高校生たちが、被爆者の方のお話を聞いて、絵を描くプロジェクトがすすめられています。それはとてもいいことだと思います。なぜなら、被曝をされた当事者の方々はどんどん天に召されいっていなくなってしまうからです。体験した人しかその話ができないとなると、もう、誰も原爆の話をしなくなってしまいます。でも、当事者じゃなくてもそのことを調べて、自分なりにそれを受け止めた形で発信していくことは、誰でもできるし、していいことなのです。むしろどんどんやったほうがいいことです。自分で文字や絵を描くためにお話を聞いたり、本を調べたりすると、ただ漠然と話を聞いているよりも、断然、理解が深まります。

広島に行ったこともなく平和の活動家でもなんでもない私にもできたことなので、誰にでもできることです。

どんな形でも良いのでぜひ、ご自分の言葉で、ご自分の描く線で、戦争について、また平和について、表現して見て欲しいと思っています。

それぞれがそのように発信していくことで、平和のタネがまかれ、平和がつくられていくと信じています。

「平和をつくる人は平和の種をまいて、義の実を結ばせるのです。」
ヤコブの手紙３：１７-１８（JLB）

平和の握手
主の平和がありますように